

令和 4 年 6 月 8 日現在

機関番号：12102

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2021

課題番号：19K13021

研究課題名(和文) 第二次世界大戦期の強制収容所における日系米国人の文化・芸術実践

研究課題名(英文) Culture and Art of Japanese Americans in the Concentration Camps during WWII

研究代表者

渡部 宏樹 (Watabe, Kohki)

筑波大学・人文社会系・助教

研究者番号：40834487

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：コロナ禍で渡米が不可能であったため、米国の資料館のデジタル資料を集中的に調査し、どういった資料館がどういった資料を所蔵しており、それらがどの程度オンラインで公開されているのかの全体像を把握することができた。米国では現在でも日系米人に対する聞き取りや彼らが保有している文化的遺物や書類・写真などを積極的に収集しており、これらの資料を利用して研究発表と論文執筆をおこなった。また、米国では日系人の歴史の教育のためのコンテンツづくりにも力を入れていることがわかり、日系人の強制収容を題材にした学校での教材としての利用を想定したシリアスゲームの紹介をアウトリーチ活動の一環としておこなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

コロナ禍のために研究の方向性には度々変更があったが、結果的に当初の計画に比しても十分に多くの知見が得られた。アメリカ学会等で研究成果の発表もおこなったが、当初想定していた日系アメリカ人研究以外の分野でも研究成果を発表することができ、表象文化研究の領域では映画作品の風景描写を分析した査読論文が、またポピュラー文化研究においては米国におけるシリアスゲームの歴史と日系アメリカ人史が交差する事例を明らかにすることができた。

研究成果の概要(英文)：Since the COVID-19 pandemic made it impossible to travel to the U.S., this project conducted intensive research on digital resources in the U.S. archives to understand what resources they hold and the extent to which they are available online. The U.S. archives on Japanese American history actively conduct interviews with Japanese Americans and collect their cultural artifacts, documents, and photographs. This project heavily relied on these online resources to do conference presentations and write research papers. This project also found the intensive effort of producing educational contents to teach Japanese American history. As part of our outreach activities, this project made a gameplay video series to introduce Prisoner in My Homeland - a serious game about the incarceration of Japanese Americans - to the general public in Japan.

研究分野：表彰文化研究、映画メディア研究、ポピュラー文化研究

キーワード：日系アメリカ人 風景 日系人の強制収容 第二次世界大戦 文化 芸術 ポピュラー文化 歴史

### 1. 研究開始当初の背景

2019年4月から開始した本研究は2011年から2018年まで南カリフォルニア大学博士課程でおこなった博士論文プロジェクトを背景としている。第二次世界大戦以前と強制収容中では日系人を取り巻く社会的条件があまりにも違うため、博士論文では強制収容以前を対象とし、本研究で対戦中の強制収容所での日系人史を対象とした。戦前に作り上げられた日系移民・日系アメリカ人の文化・芸術活動やそのネットワークが、強制収容によって大きな変化を被った時に、果たして彼らの文化芸術活動にはいかなる連続性や変化があったのかを明らかにするために研究を開始した。

### 2. 研究の目的

日米開戦によって、敵性外国人とされた米国に住む日本人移民やその子孫で米国市民権を持つ日系米国人(以下「日系人」として総称)は、米国政府による強制移住の対象とされた。1942年から1946年の間、西海岸を中心におよそ12万人の日系人が都市から隔離された10ヶ所の強制収容所(右図)に転住を強いられた。本研究は、強制収容所における日系人の文化芸術活動を通して、彼らの自意識や世界の認知の第二次世界大戦勃発前からの変化を探る。特にさまざまな文化芸術実践を「風景」を切り口として横断的に分析することで、戦後に主に二世以降の日系人によって語られた愛国的市民としての日系米国人という物語とは異なる彼らの主観的、感性的領域を明らかにすることにある。



### 3. 研究の方法

米国内の10の日系人の強制収容所における日系人の文化活動を、1) 世代と言語、2) 収容場所と思想の二つの観点で分類し、彼らが残した和歌、散文、論説、絵画、写真、日本庭園といったものを対象に、それらの中に日本や米国西部の風景がどのように表象されているかを検討する。

#### 1) 世代(一世、二世、帰米二世)と言語(日本語、英語)

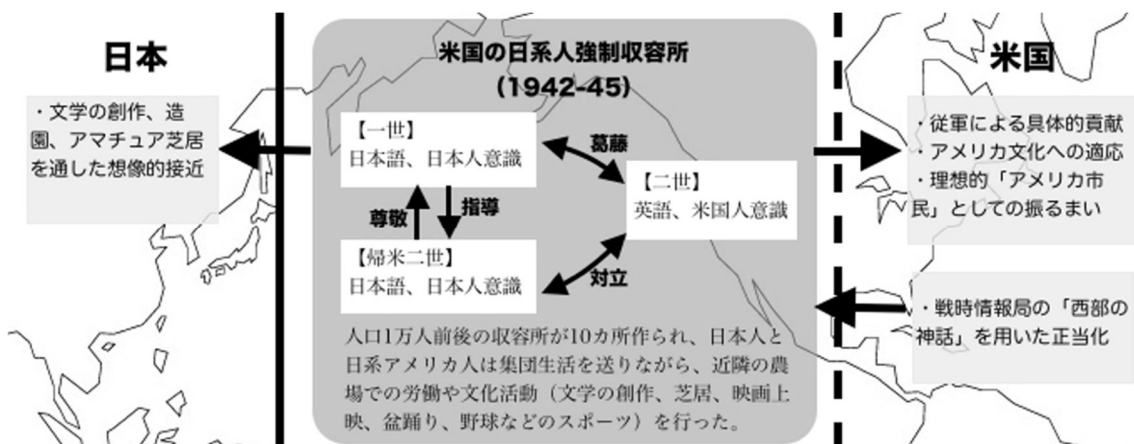
日本生まれの一世は日本語を母語とし基本的に日本への愛着が強かったが、一方で米国生まれで日本に行ったことがない二世は日本語も拙く米国人としての意識が強かった。また二世の中でも、出生後に日本に送られ日本で教育を受けた後、労働ができる年齢になって米国の親元に送り返された帰米二世は一世に近い価値観を持っていた。

#### 2) 収容場所と思想

日系人たちは強制収容に際して「忠誠質問」と呼ばれる調査を受け、日本と米国のそれぞれに対して忠誠を誓い軍に志願する意思があるかが確認された。その質問への応えによって、別の収容所に振り分けられ、収容所ごとの出版物にはその思想の違いが表れている。例えば、日本に対して忠誠を誓った者が集められたトゥーリー・レイク収容

所で発行された『鉄柵』は日本に対しての愛国的な作品が掲載されたが、米国に忠誠を誓った者が集められたポストン収容所では娯楽的な和歌や詩が多く投稿された。

これらの二つの観点で日系人の活動を分類し、特に強制収容前との社会的条件の変化に注意しながら、収容者の文化芸術活動の中の風景の表象の変化を明らかにする。強制収容以前は日本との関係が維持され一世の発言権が強かったが、強制収容によって日本との関係は閉ざされ、収容所では30年代から社会の表舞台に立つようになっていた英語を話す二世の発言権が強まった。それによって、それぞれのグループがどのように世界と自己の関係を日米という二つの帝国の間で捉え直していったのかを文化芸術実践の中から探っていく。具体的な例を挙げると、戦前の一世代文壇では「移民地文芸論」と呼ばれる運動が起こり和歌に見られるような日本語の美学の移植と現地への適応が目指されていた。だが、日本語を解さない二世の詩人たちはこのような和歌の想像的な日本の風景をどのように捉えられていたのか？といった点に注意し、それまで想像的に接続された日本から切り離されたときに、認識的な世界像にどのように変化が起きるのかを明らかにする。



#### 4. 研究成果

コロナ禍で渡米が不可能であったため米国の資料館での現地調査は行うことができなかった。代替措置として、米国の資料館のデジタル資料を集中的に調査し、どういった資料館がどういった資料を所蔵しており、それらがどの程度オンラインで公開されているのかの全体像を把握することができた。日系人の強制収容時の収容者の文化・芸術活動については『日系アメリカ文学雑誌集成』シリーズ（不二出版）が日本で手に入れることができるもっとも浩瀚な一次資料であり、多くの研究者が同シリーズと邦字新聞のマイクロフィルムに頼って研究をおこなってきた。これらの資料の有用性は現在でも変わらないが、加えて米国では現在でも日系米人に対しての継続的な聞き取りや彼らが保有している文化的遺物や書類・写真などを積極的に収集していることがまず明らかになった。これらの資料を利用して、上述の研究手法に則って研究を行い、その成果は発表や論文という形で公開した。一部論文については査読中である。

また本来の研究の方向性とは別の方向性でも研究成果があった。渡米して現地調査をすることができなかったため、代わりに文献資料を用いた理論的研究に多くの時間を費やし、日系アメリカ人研究以外に応用した。日系米人が収容所生活の中で周囲の風景をどのように見ていたのかを検討するために、収容所内で建設された日本庭園や描かれた風景画を分析するために過去の風景論を理論的に検討した成果を、風景描写に定評がある新海誠

監督の映画作品の分析に流用することができた。この研究成果は2021年に「風景から光景へ 『君の名は。』における仮想のレンズと半透明性」として、採択率30%程度のトップジャーナルで発表した。

また、副産物的な研究成果として、米国では日系人の歴史の教育のためのコンテンツ作りにも力を入れていることがわかった。全米人文基金など米国の公的な機関の財政的支援を受けて、ミッションUSという非営利団体がアメリカ史を学習するためのシリアスゲーム・シリーズを制作している。同団体が制作している6つのシリアスゲームの中に Prisoner in My Homeland (母国の中の虜囚) という日系人の強制収容を題材にした作品が存在している。これは本研究の「風景」というテーマからも興味深いものであるが、同時に日本における歴史教育や英語教育にも資するものであるので、アウトリーチ活動の一環として紹介した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 渡部宏樹	4. 巻 15
2. 論文標題 風景から光景へ 『君の名は。』における仮想のレンズと半透明性	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 表象15：配信の政治 ライヴとライフのメディア	6. 最初と最後の頁 191-207
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 2件/うち国際学会 2件）

1. 発表者名 Kohki Watabe
2. 発表標題 Diversity of Japanese Americans' Reception of Movies in the Internment Camps during WWII
3. 学会等名 Society for Cinema and Media Studies (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 渡部宏樹
2. 発表標題 今なぜファン/ファンダム研究か？ ヘンリー・ジェンキンス『コンヴァージェンス・カルチャー』と日本
3. 学会等名 日本アニメーション学会海外文献研究部会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Kohki Watabe
2. 発表標題 Diversity of Japanese Americans' Reception of American Movies in the Internment Camps during WWII
3. 学会等名 Society for Cinema and Media Studies (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 渡部宏樹
2. 発表標題 第二次大戦前のカリフォルニア農業共同体の「日本人ホール」における日系移民の映画上映と文化活動
3. 学会等名 アメリカ学会（招待講演）
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 ヘンリー・ジェンキンス、渡部宏樹、北村紗衣、阿部康人	4. 発行年 2021年
2. 出版社 晶文社	5. 総ページ数 556
3. 書名 コンヴァージェンス・カルチャー	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------